



上流へ移動するとき、路面はダートだったにもかかわらず、とてもスムーズで、まるでオンロードを走っているかのようだった



大人2人がゆったり寝れて、高さも150cmと広々とした空間のコロンブス。



ここ一迫川では、花山村漁協のルールにより、入漁券の半券をダッシュボードの上に置く。券を持った釣り人が溪に入っていることの証明と、後からきた釣り人の混乱を防ぐことにも一役かっている



午後になってから、顔を出してくれたきれいなヤマメ、やっぱり釣ればホッとする



新鮮な空気を身体に浴びながら準備をする。しかし内心早くロッドを振りたくて焦っている



計画内での一つの思いが成就された瞬間



今回お世話になった佐藤旅館。館内は迷路のように入り組んでいる



朝と夕食共に純和風の食事。地の野菜や自然薯などが使われている

喜びか、それとも単なる開き直りなのか。働く男が旅に出る。それはそれで大変なことだ。やっつけた仕事のこと、残業と嘘をつき、最後まで事務所に残ってタイングをしたこと、奥さんには出張と偽って出発したこと。煩わしいからと携帯電話をわざと置いてきただけに、よけいに気にかかる。

さまざまなモヤモヤを、缶コーヒーといっしょに飲みこんだ。

過去4台の車も、連続で4WDを乗り継いでいるほど四駆愛好者の大川さん。そんな彼が今回運転する車は、V6・3000DOHCのエンジンを搭載した、マツダ・トリビュート・フィールドブレイク。

夜の中をひた走る。会社のコンピュターを拝借し、インターネットを駆使し

て見つけたAnother Worldに向かう。

宮城、岩手、秋田にまたがってそびえる栗駒山の南麓に、湯浜、湯の倉、温湯と温泉があり、この3つを花山三湯と呼ばれるらしい。その中心地でもある温湯温泉。宮城県栗原郡花山村の温湯温泉の歴史は古く、平安時代の末、1150年頃のある日、山崩れで温泉が湧きだしたと伝えられる。当時栄華を誇っていた藤原秀衡は、温泉にちなんだ神社を作らせたという。藤原秀衡といえは、源頼朝の軍勢から義経をかくまい、それを理由に藤原氏は頼朝に滅ぼされた。そんな歴史を連想させる。そして江戸時代には、ここは東北を結ぶ関所でもあった。仙台藩寒湯番所跡が今も残り、旅人が疲れた身体を休め、英気を養う、貴重な山間の出湯

である。ケガや病気だけを治すのではなく、疲れた心まで癒してくれ、ふたたび戦場へ元気な姿で送りだしてくれる昔からの湯治場。まさに、働く男の一人旅にふさわしい場所ではないか。

築館ICからR398を経由して、約35kmで温湯温泉に辿り着く。温泉地のすぐ下を、C&R区間が設定された一迫川が流れ、予約した宿からは、歩いて1分という距離。

木造2階建ての建物が2棟ある旅館。大正時代から昭和にかけての建築で、一部明治時代の部分も残っている。2棟の2階を結ぶ渡り廊下や、木枠のガラス戸、部屋との仕切りの障子戸などが、歴史を感じさせる。

釣りの準備は怠らなかつたものの、大

川さんは明るい時間から露天風呂に直行した。都会から持ち込んだほこりと垢を、温泉の湯で一気に洗い流す。そこから眺める溪のすばらしさを、言葉もなく仁王立ちしたまま、目(というより全身)に焼き付けた。大川さんの身体は宙に浮き、日はとろけ始めた。このあと内風呂にもゆつくり入ると、足取りはすっかり軽くなった。

あまりの気持ちよさに長湯をしてしまった大川さん。涼むつもりでロビーに行ったと、そこで魔法でもかけられたのか、石のように固まってしまった。その視線の先には、銀鮭の甘露煮や、蜂蜜、果物、民芸品など、地のものが使われているたくさんのお土産が、「私を買って」とばかりに行儀よく並んでいる。見つけて